

ビルマ・カレン民族の分裂 宗教
ではなく不平等から

ビルマで民主化指導者、アウンサンスーチーさんが自宅軟禁を解かれたことは、民主勢力に取って明るい材料には違いないが、国内民主化と少数民族の自治権獲得への運動に直ちに弾みがつくと見るのは難しそうだ。

それは、反政府最大勢力のカレン民族同盟(KNU)が内部分裂し、タイ国境・マナプロウの総司令部を失っているからだ。私はスーチーさんの軟禁解除前だが、このほどKNUの元兵士に会った。軍事政権は長年の頭痛の種である少数民族問題を一気に解決しようとしていながら、カレン族からの交渉提案を拒み、軍事力という解決へ突き進む気配が濃厚でさえある、という。

圧倒的な軍事力の差にも屈することなく、民族自治を求めて戦い続けてきたカレン族の敗退は、容易に信じられない出来事だった。その真相を探るため、タイのメーサリアンから国境の国道一〇五号をバイクで南下、途中で山道に折れて約五時間、マナプロウに近いメラモクローにた

どり着いた。一月末に内部分裂に伴う戦闘が起き、ビルマから逃げて来た約五〇〇〇人のカレン人難民が新しいキャンプを作っている。

キャンプ内に懐かしい顔をたくさん見つけてホッとした。数年来の友人である元カレン兵(五二)一家も無事だ。彼は、内部分裂の背景を説明してくれた。

KNUの指導部を率いてきたのは、カレン族の中では少数に属するクリスチャン・カレンだった。その下で、カレン族の八割を占める仏教徒カレンが、共に戦い続けてきたのだ。

仏教徒の反発をおおるように、ビルマ政府の意をくんだ一人の僧侶が登場した。この僧はマナプロウの近くにパゴダ(仏塔)の建設を主張。指導部は、パゴダが攻撃の目標になるとして反対した。平和・菜食主義

を唱えるこの僧は、「パゴダの建設を認めないのは、仏教徒への差別だ。指導部は政府側と交渉しようと思わず、平和を望んでいない」と批判。仏教徒を引き連れカレン仏教徒同盟(DKBO)を組織し、KNUを分裂させてしまった。

DKBOは軍事部門としてカレン仏教徒同盟軍(DKBA)をもち、KNUとの武力衝突を引き起こした。四月末から五月にかけ、DKBA

の兵士たちは、なんとビルマ政府軍と共にタイ国境を越え、ロケット砲を使い、同じカレン人の無抵抗の難民たちを無差別に襲撃。難民たちは山中に逃れたが、家を焼かれた。

キリスト教、仏教、イスラム教徒が同居する難民キャンプへの攻撃は、政府軍との結びつきを疑われていたDKBAの正体を表した。

この後、タイ側はDKBAの越境で、また、ビルマ側は反政府勢力の活動をタイが黙認しているとして、互いに不快を表明。両国が国境のモエ(イ)川に建設中の「友好の橋」も工事を中断した。ビルマ政府がDKBAとともにカレン族にどう対応するのか、目が離せない。

以上一面、以下三面に続く

ビルマ・カレン族の分裂

「宗教ではなく不平等が原因」

難民キャンプの朝は早い。タイ・

ビルマ国境のメラモクローでも、まだ夜が明けないころから人々が働き始める。薪割りしたり、竹を組んで家を作る男たち。子どもや女性は水くみにかかる。私に友人(五二)も兵士を辞め、今は学校づくりのため、若者の先頭に立って山腹の地ならしに当たっている。

五〇年近く団結を誇っていたカレン族が、一人の僧侶の扇動で簡単に分裂するとは不思議でならない。彼は内情を説明してくれた。「マナプロウの陥落はカレン族の敗北ではない。同じ民族のカレン民族同盟(KNU)とカレン仏教徒同盟(DKBO)が殺し合いを避けるため、やむなく司令部を放棄したのだ」

「内部分裂は宗教に起因するのではない。実は『持つ者』と『持たない者』の不平等が最大の理由だ。それに長年の戦闘で厭戦気分も加わった」

そして、KNU兵士だけでなく、村人までが指導部に対して不信任感を

抱いていた事実を明かした。自らKNUの特定の地位にいた人物の口から出た言葉に偽りはあるまい。

彼は具体例を挙げた。前線の兵士たちの食事の粗末さ。それに比べて指導部とその周辺にいる人たちの派手な生活。ゲリラ戦を続けていけば、そのうち勝利すると言い続け、かつての功績だけで指導部のいすに座り続ける「老兵士」たち。カレン族には教養がないと言いながら、自分の子どもには外国で高等教育を受けさせることのできる一部の人たち。

難民キャンプ内でも、幹部がいるだけで、物資の割り当てが違ってくる。「マナプロウと南部の拠点コムラを失い、人々は初めて指導部の誤りに気づいた。タイ国境に逃げてきた一〇万人にも及ぶカレン人、ビルマ人たちは今、意気消沈している」

「だが、私たちは民族の誇りを胸に五〇年近く戦ってきた。今すぐ態勢を立て直すことはできないが、難民キャンプが落ち着けば、反撃に転じる用意はできている。指導部の改革も進んでいる」

ろうそくの火の下で、カレン族の将来を見つめるような彼の目が輝い

た。

そのキャンプも、私が別れを告げた日の午後、政府軍を含むとみられる約二〇〇人のDKBO軍に襲われ、数百人の難民がビルマ側に連れ去られたという。彼も消息を絶ち、気になっっている。

彼の話で、反政府の闘士も生身の人間同士だとの思いを強くした。政府側はタイ側に逃げた難民を力ずくで連れ戻そうとしている。カレンの問題は片づいたと印象づけたためだ。しかし、DKBO支配区に戻ることを嫌い、難民キャンプにとどまろうとする約一〇万人の難民の存在こそが、ビルマ政府と国内の厳しい実態を物語っている。

写真キャプション

・タイ領内のビルマ国境手前500
・検問所のタイ軍兵士に「これ以上奥に行く何が起るか分からないぞ」と行く手を遮られた。

・夜が明けないうちから水くみを手伝う幼女「メラモクローの難民キャンプで」

・カレン民族同盟の総司令部があったマナプロウからポートで北へ2時間。ビルマ政府軍の命令を受けてか、カレンの村人たちが物資の運搬をさせられていた「タイ側から撮影」